

## 能登の出かせぎ

誌名	農林統計研究
ISSN	09161538
著者名	中沢,吉輔
発行元	農林統計研究会
巻/号	19号
掲載ページ	p. 54-61
発行年月	1971年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 能登の出かせぎ

中 沢 吉 輔

### はじめに

石川県における農業労働力の他産業への流動は、加賀地域では通勤の形をとり、能登地域では一部出かせぎの形で増加傾向がみられる。

出かせぎは、主として能登地域の特定な地帯に集中し、これらの地帯では、農業収入のみでは生活の維持向上が望めなく、また、通勤可能な地域に適当な産業のないこと、および、仮にあって低賃金であることなどの理由で、中京地区、阪神地区へ出かせぎとなり、最近においては、これが長期化、通年化の傾向さえ生じてきている。しかも、このことは、男にかぎらず、主婦にまでもおよび、出かせぎ期間中は、老人と子供だけとなり、家庭生活の破壊につながるような現状からして、それが、農村社会の秩序の破壊にも通ずることとなり、出かせぎ問題は、もはや単なる地域農業の発展阻害要因としてだけでなく、農村社会の問題として近年急に注目されるところとなっている。

以上の観点から出かせぎ農家の市町村分布と、最近における増減傾向を中心に、出かせぎの背景とその要因分析に努め、多少なりとも今後の出かせぎ対策に貢献したいと本稿をとりまとめたものである。

### I 能登の出かせぎ

#### 1 歴史的背景

##### (1) 古代

能登地域は、日本海側で最大の能登半島が中心で、この半島の日本海側を外浦、富山湾側を内浦と呼び、また、半島を分けて基部を口能登、先端部を奥能登と呼んでいる。外浦は断崖が海にせまっているのに対して、内浦は、沈降海岸で入江が多く、古くから舟による山陰の出雲地方、遠く朝鮮との文化交流があり、加賀地域より先に開けたともいわれている。

当時、能登は陸続きで、わずかに加賀に接していたというものの、途中、昌知瀉地溝帯の湖沼によってさえぎられ、能登独自の文化の発展をかもし出したものである。

時代がくだるにつれて、海路より陸路の方が主要な交通動脈となり、したがって、能登は政治的にも経済的にもとり残された僻地として、生活も昔から伝えられてきた仕事をそのまま、大事に守っていく住民性が養われてきたのである。

##### (2) 藩政時代

能登は、平野といっても、もと海峡であった昌知瀉地溝帯が最大であって、ほかには、谷間のわずかな耕地や、台地の上の小平原しかなく、冬期間積雪が多いことから耕地の利用も進まず、米作偏重の零細農業が主体となっていた。また、耕地に倍増す森林面積は、藩令によって主要樹種7種(まつ、すぎ、ひのぎ、けやき、とが、くり、うるし)を保護樹種として伐採等に制限が加えられていたため振わず、漁業は、内浦のブリ大敷網を除けば取立てというほどの

ものではなく、最初から苦しい生活条件があたえられていたといわねばならない。

こうした苦境の打開策として生まれたのが、内浦一帯の塩作りと、外浦一帯のうるし採集である。能登の製塩の歴史は古く、7世紀以前から塩が焼かれていたともいわれている。領主はもちろん、住民の生活に大きな比重を占めてくるのは、江戸時代で、加賀藩は塩を厳重な専売制のもとにおき、米を農民に前貸して塩で返納させたと伝えられ、米1石が塩7俵半というのが相場であった。一方、うるしの生産は、室町時代から伝わっていたともいわれているが、江戸時代に入って、加賀では、農業生産に圧され衰退するのに対して、能登では輪島塗の発展に伴って、需要の増大や耕地不足からくる農民の生活難打開からうるしの採取が非常に盛んになってきた。輪島塗が隆盛になった理由の一つとして大量の生うるしを容易に地元で求めることができた事情は無視できないのである。

### (3) 明治

藩政廃止とともに、各県への交流が自由になると、生産コストの高い内浦一帯の塩作りも衰退し、明治4年の2万トンを超えて、昭和34年にはまったくなくなり、また、外浦一帯のうるし採集も生産体制の改良がなく、乱獲により大正末期を最後として能登から姿を消した。

### (4) 昭和(戦前)

奥能登では、製塩とうるしの衰退に対処して、一方では森林の活用がはかられ、木材、製炭がしだいに盛んになってくるが、多くの零細農家の生活を充たすにはほど遠く、外浦では、冬の出漁ができないことから、冬期間、北海道への出かせぎ出漁がはじまった。また、内浦では、冬期間漁業出かせぎより安全な「杜氏」出かせぎがはじまり、大正末期から昭和のはじめにかけて、能登杜氏の伝統的、特殊技能的地位を形成したのである。

これに対して口能登では、一望水田化した邑知瀧地溝帯を中心として、農業が産業の基幹となり、さらに伝統的な上布の生産が、農家の余剰労働力の恰好なかせぎ場となっている点、奥能登に比べてよほど恵まれた条件にあったといえよう。

### (5) 戦後

戦後、経済の成長が急速に進展するなかであって、出かせぎの形態も変ってきた。それは、労働力の需要の面からみると、他産業発展に伴う農村労働力の吸収であり、労働力の供給の面からみると、都市化の浸透、諸物価の高騰などによる生活水準上昇に対応する姿でもある。

能登地域、とくに奥能登では、青年層を中心に農業労働力が流出するなかで、土地にふみとどまって出かせぎする人達は、漁業や杜氏だけではなく、県外に広く労働市場を求めて、都市産業に進出し、出かせぎ者も世帯主、後継者から婦人層までに波及している現状である。

## 2 出かせぎ農家の地帯分布

能登地域の出かせぎ農家数は、5,124戸(45年センサス)で、本県の出かせぎ農家数の大半(98%)を占めている。したがって、本県で出かせぎ地帯といえば、能登地域、とくに奥能登をもって代表されるのが通常である。

市町村別に出かせぎ農家の分布をみると図一に示すとおり、各市町村にわたっているが、金沢市に近い口能登から奥能登に行くに従って出かせぎ農家が多くなる傾向がみられる。出かせぎ農家率によって地帯分けすると、出かせぎ農家率30%以上の市町村は、奥能登の先端に位置する珠洲市、内浦町、柳田村の3か市町村(以下出かせぎ多地域と称する)10~20%の市町村は、輪島市、穴水町、門前町、能都町の4か市町、(以下出かせぎ中地域と称する)10%未満の市町村は、口能登の13か市町村(以下出かせぎ少地域と称する)の3地帯に分類することができる。

一方、出かせぎ者の推移をセンサス年次によってみると、35年は、3,598人、40年8,692人、45年

9,170人となり、35年から45年の10年間に約2.5倍の増加をみている。また、これを5年ごとに区切ってみると、35年から40年にかけては、2.4倍の増、しかし、40年から45年にかけては5%の増にとどまり、近年、増加傾向は著しく低下していることがうかがわれる。しかし、出かせぎ地帯別にみると、出かせぎ少地帯は、40年から45年にかけて27%の減、中地帯7%の減といずれも減少しているのに対して、多地帯では、27%の増となっており、最近一般に能登の出かせぎは横ばい傾向にあるといわれているが、奥能登では、依然とし増加傾向が強いことがうかがわれるのである。

II 出かせぎを支配している要因

1 自然的立地条件

能登地域は、隆起準平原からなり、ところどころに500メートル程度の残丘を含めて大部分が林野で占められ、耕地の少ないことが致命的である。また、半島の日本海側は断崖からなり、漁港にも恵まれず、冬期の出漁を困難にしている。一方富山湾側は、漁港にも恵まれているが、いずれも、近年沿岸漁業の不振から半漁・半農の農家はしだいに影を薄めている。

耕地は、総土地面積の16%と少なく、平野は口能登の呂知瀉地溝帯（長さ24キロメートル、幅4キロメートル）が最大であって、そのほかは、河谷ぞいに発達した耕地が散在する程度で、これらは千枚田や棚田が多いことから農業生産の発展を大きく阻害している。

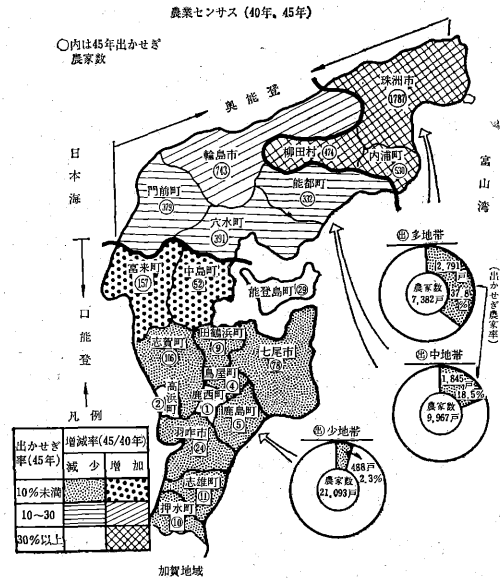
能登の気象は、浦洋性気候で比較的温暖、多湿で日較差、年較差は小さいが、冬期間の降雪は、12月中旬から3月中旬までで、積雪量は年によって差はあるが、平坦部で1メートル、山間部で2メートルを越すこともあり、冬期間の交通、および農業生産を著しく困難にしている。

2 社会的経済的条件

能登地域の工業は、地理的環境および原材料のうえで、重工業の成立条件を欠くため、いきおい織物等軽工業の生産を主体に発展してきた。しかし、その多くは、「8台はた屋」と呼ばれる零細規模の域を脱し得ない。ただ口能登では、金沢市からの交通事情がよいため、比較的織物の大工場がみられ、加えて、七尾市を中心に、セメント工場、木材加工工場などが進出するなど、奥能登に比べて、その様相を異にしている。

能登地域の事業所数は、表一1に示すとおり、1万7,869で、出かせぎが多い地帯ほど事業所数が少ない。また、事業所従事者数、工業製品出荷額においても同様な傾向を示している。これ

図一1 出かせぎ農家の地帯分布



表一1 事業所の概況 (44年工業統計)

項目	事業所数		従業者数		製品出荷額		
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	
出かせぎ	少地帯	10,938	61%	60,222	66%	52,264	85%
	中地帯	4,417	25%	20,528	22%	7,309	12%
	多地帯	2,514	14%	10,751	12%	2,102	3%
能登地域	17,869	100%	91,501	100%	61,675	100%	

は奥能登では、零細規模の事業所が大半で、かつ事業所数が少なく、兼業の労働市場に恵まれていないことを物語っている。

産業別就業人口を、その構成割合でみると表-2に示すとおり、出かせぎ少地帯では、第1次、第2次、第3次産業ともに均等な構成割合を示しているのに対して、出かせぎ多地帯では、第1次産業の比重が高く、反面、第2次、第3次産業の低率がめだっている。

このように、奥能登で、第2次、第3次産業の立ち遅れている要因として、交通事情があげられる。すなわち、半島の先端珠洲市から金沢市までは、汽車で約半日を要し、また国道159号線は七尾市より能登半島を海浜に沿って宇回し、羽咋市に至っているが、奥能登では、観光を兼ねた交通量が多く、産業道路としての利用に乏しいことなどがあげられる。

このように、奥能登で、第2次、第3次産業の立ち遅れている要因として、交通事情があげられる。すなわち、半島の先端珠洲市から金沢市までは、汽車で約半日を要し、また国道159号線は七尾市より能登半島を海浜に沿って宇回し、羽咋市に至っているが、奥能登では、観光を兼ねた交通量が多く、産業道路としての利用に乏しいことなどがあげられる。

### 3 農村構造

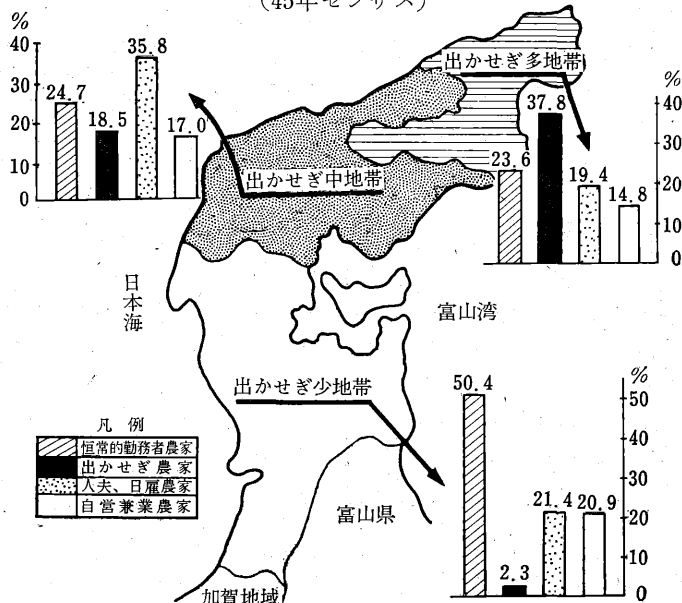
能登地域の総農家数は、3万8,442戸（45年センサス）で、県の総農家数の約半数強を占めている。出かせぎ地帯別では、少地帯、2万1,095戸（28.7%）、中地帯9,968戸（13.6%）、多地帯7,382戸（10.0%）である。また農家率（総農家数総／世帯数）では、53%、50%、66%となり、いずれも県平均の29%を大きく上回り、とくに多地帯では農家率が高く、農山村の色彩が強いことから、それだけ他産業の発展が進んでいないことを示しているといえよう。

農家1戸当たりの耕地面積は、出かせぎ少地帯、82アール、中地帯75アール、多地帯70アールと、出かせぎの多い地帯ほど経営耕地が少なく零細農家が多いことを示し、反面、農家1戸当たり基幹的従事者数は出かせぎ少地帯0.87人、中地帯1.07人、多地帯1.10人と出かせぎが多い地帯ほど多くなっている。これは出かせぎ中、多両地帯では、ほ場の立地条件が悪く、農業の機械化が進んでいないために、多くの基幹的労働力を必要とし、このことが、農閑期の労働力の燃焼の場を求め、出かせぎをしなければならない要因の一つとなっている。

表-2 産業別就業人口  
(40年国勢調査)

項目	総数	第1次産業	第2次産業	第3次産業	構成比		
					1次	2次	3次
出かせぎ					%	%	%
少地帯	94,324	40,033	25,197	28,094	42.4	26.7	30.9
中地帯	44,257	24,630	6,476	13,151	55.7	14.6	29.7
多地帯	25,939	17,012	4,061	5,866	65.7	11.7	22.6
能登地域	164,520	81,675	35,734	47,111	49.7	21.7	28.6

図-2 兼業種別農家数の構成比  
(45年センサス)



農家の兼業状況を兼業種類別農家数の割合でみると、図一2に示すとおり、出かせぎ少地帯では恒常的勤務と自営兼業農家の占める割合が他の両地帯に比べて多い。これは、地場産業の発展もさることながら、交通事情の発達により、金沢市の経済圏に、時間的に接近したことが一つの要因と考えられる。出かせぎ中地帯では、人夫日雇農家が他の地帯をしのいで高率を占めている。この地帯では、出かせぎ多地帯と同様、工場の進出が少ない中であって、各市町村が協力して道路の開発や、林業振興を計画的に進めているため、人夫日雇農家が多いのである。出かせぎ多地帯では、前記両地帯に比べて、兼業の労働市場が少ないことから、やむを得ず、農外所得源を出かせぎに求めているため、出かせぎ農家が他の地域に比べ圧倒的に多くなっている。

### Ⅲ 出かせぎ者の性格

出かせぎ者は、従来から零細農家が中心となって行なわれてきた。今もその主体には変りはないが、出かせぎ地帯別にみると、出かせぎ者の性格に若干の変化がみられるので、その特徴をあげてみよう。

表一3 出かせぎ者の性格（構成比）その1  
(44年農業会議所資料)

項目	世帯上の地位					経営耕地規模				
	世帯主	世帯主の妻	後継者	後継者の妻	その他	0.5 ha 未満	0.5~1.0	1.0~1.5	1.5~2.0	2 ha 以上
出かせぎ	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
少地帯	59.7	17.6	16.0	2.0	4.7	43.1	46.1	9.7	0.6	0.5
中地帯	50.7	14.2	26.0	5.5	3.6	47.2	43.7	7.3	0.8	1.0
多地帯	50.8	19.9	17.6	6.1	5.6	48.8	42.9	7.8	0.5	
能登地域	51.4	17.9	20.2	5.6	4.9	47.8	43.5	7.8	0.6	0.3

表一4 出かせぎ者の性格（構成比）その2  
(44年農業会議所資料)

項目	出かせぎ日数					出かせぎ先					
	30~60日	60~120	120~180	180日以上	不明	京浜	中京	京阪神	その他	県内	不明
出かせぎ	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
少地帯	34.6	30.1	19.9	15.4		16.0	6.0	35.7	10.3	31.7	0.3
中地帯	12.5	26.3	26.3	34.9		10.9	10.1	28.1	14.2	35.6	1.1
多地帯	3.8	28.2	52.6	14.6	0.8	4.8	16.9	37.5	27.7	12.5	0.6
能登地域	9.3	27.8	41.2	21.2	0.5	7.7	13.8	39.2	21.9	21.6	0.8

#### 1 経営耕地規模

出かせぎ者の経営耕地規模では、1ヘクタール未満の零細農家が91.3%と大半を占めている。(表一3参照) これらの農家の多くは、農家の収入面からみた限りでは、出かせぎが本業で、農業はまったく副業となっている。出かせぎ地帯別の特徴をみると、少地帯では、経営耕地の比較的大きい階層が他の地帯に比べて出現率が多い。これに対して多地帯では零細な0.5ヘクタール未満層と、0.5~1.0ヘクタール層に集中している傾向がみられる。

## 2 出かせぎ者の世帯上の地位

世帯主がいずれの地帯とも半数を占めていることには変りはないが、出かせぎ少地帯では、世帯主が主体、中地帯では、世帯主と後継者が主体、多地帯では、世帯主、後継者、世帯主の妻の三者が主体となっているのが特徴といえよう。すなわち、出かせぎが増加している多地帯では、出かせぎ者は、世帯主にとどまらず、後継者、世帯主の妻までにもおよび、1戸の農家で2人の出かせぎ者は珍しくないのが現状である。これに対して出かせぎの減少している少地帯では、出かせぎ者はしだいに世帯主のみにとどまる傾向を示しているといえよう。

## 3 出かせぎ日数

出かせぎ者の出かせぎ日数について、地帯別の特徴をみると、(表—4参照)出かせぎ少地帯では、30~60日と60~120日の両階層で65%を占め主体をなし、中地帯では、180日以上が35%と最も多く、また多地帯では、120~180日が53%を占めて最も多い。これらのことから出かせぎ多地帯では、失業保険との関連もあっておおむね6か月の出かせぎが多いのに対して、出かせぎの少ない地帯では、失業保険と関係なく農閑期である冬期間に労働力の燃焼をはかっている状況がうかがわれる。

## 4 出かせぎ先

出かせぎ地帯別に、出かせぎ先の特徴をみると、出かせぎ少地帯では、京阪神と県内が多く、中地帯では、県内、京阪神の順に多く、多地帯では、京阪神が圧倒的に多い。これらのことから、出かせぎの減少している出かせぎ少、中地帯では、県内出かせぎが、かなりの比重を占めていることが注目され、これに対して、出かせぎ多地帯では、出かせぎ収入源に多くの生計費を頼っていることから、賃金の高い県外へ主力が向けられていることがうかがわれる。

# IV 最近における出かせぎ農家の特徴的動向

## 1 出かせぎの動機

出かせぎの動機は、近くに兼業の労働市場が少ないため、余剰労働力の燃焼を出かせぎに求めて家計費の補てん、現金収入が魅力の根底となっていることは論議の余地もないところであるが、これを出かせぎ者の心理状態によって分類すると次のように大別される。

### (1) 生活水準の向上をねらって

戦後の農家は、農地解放によって自作農となったものの、能登地域の零細農家では、生活費を維持するのに手一杯で、家の新築、子弟の高校、大学等の進学、自動車の購入など、生活環境、生活水準の向上をはかることは困難であった。それが出かせぎという職場を見出したことによってその達成も可能となった。このことが部落内に波及して、目的達成のためなら出かせぎもいとわなないとした農家が多くなってきている。

### (2) 観光をかねて

狭い能登で一生暮すより、元気なうちに広く見聞を深めたいとする出かせぎ者もいる。これは中年以上の婦人層に多く、農作業を主体とする出かせぎで、一例をあげると、大阪で稲刈りを終え、和歌山でみかんを摘み、そして静岡でかん詰工場へといった流れ作業の手順で出かせぎし、出かせぎ先では、日曜日や作業の終了日には、受入れ側で、マイクロバス等で観光の便宜をはかっているところもあるという。正月には、出かせぎ者は一斉に帰休するが、話題は出かせぎ先の話で一杯、こうしたことが観光出かせぎを助長する要因ともなっている。

### (3) 核家族の分離を望んで

毎日舅や小舅と顔つき合わせているよりも、ある期間舅から離れて生活する方が、家族内に

新鮮味がわき、融和がはかれるとした出かせぎ者もいる。最近夫婦そろっての出かせぎ、あるいは老夫婦は夏の期間、若夫婦は冬の期間といった農家の出かせぎがみられる。

## 2 出かせぎ者の性格

### (1) 年齢

4～5年前までは30～40歳代が出かせぎの中心であったが、最近では、40～50歳代が中心となり、少数ではあるが60歳代までに波及している。

### (2) 主婦の出かせぎが増加

近年、主婦の出かせぎ者がしだいに増えてきている。家計をあずかる主婦にとって、冬期間これといった仕事もなく、諸物価の高騰、教育費の増大などから現金収入に大きな魅力があり、また、きびしい冬期間を地元で過すより暖かい出かせぎ先の職場で過す方が、よいとする主婦が多いためである。

### (3) 夫婦そろって出かせぎの台頭

夫婦そろって同一工場へ出かせぎするケースが台頭してきている。大阪方面の繊維工場では、夫婦寮の設備など、夫婦の出かせぎ者に対する設備が完備してきている。男が単身出かせぎすると、飲酒する機会が多くなるなど出費が嵩み、精神的に安定を欠く恐れもあるので、こうしたケースが現われはじめたものであろう。

### (4) 出かせぎ先

出かせぎ者は、高賃金を求めて、時間外勤務の多くできる職場へと集中する傾向がみられる。今まで県内出かせぎを主体としていた者でも、関西方面へ出るケースが多くなり、特に万国博を契機に大阪方面への増加がめだっている。反面、農作業を主体とした和歌山、静岡、奈良方面へは出かせぎは漸減している。

### (5) 「杜氏」は大幅に減少

古い歴史と伝統をもって踏襲されてきた能登杜氏は、近年大幅な減少をみている。能登杜氏は20人ぐらゐの集団で、出かせぎ先の酒造を請負うケースが多く、最近においても封建的な雇用制度は変わらない。したがって、その賃金をみると、日当で、杜氏3,000円、頭2,500円、麴屋2,200円、甑屋2,000円、釜屋1,800円と賃金差がある。特に、麴屋～釜屋は若い人が多いため、繊維、染色、土木関係の会社等から求人合戦が展開されている矢先でもあり、若い人達は高賃金を求めてこれらの職場へ就職するものが多くなり、昔しながらの「杜氏」集団が崩れつつある。

## 3 出かせぎによる明暗

### (1) 明るい面

ア 出かせぎした現金収入によって、農家の生活環境や生活水準が著しく向上してきた。一例を示すと、総農家数1,400戸のうち、700戸、1,000人が出かせぎしている鳳至郡柳田村では、約1,200戸が自動車を所有し、また、同郡門前町田村部落では、42戸のうち30戸が自動車を所有している。

一方、高校進学者も5～6年前までは、大農家か、旧家の子弟に限られていたが、出かせぎによる所得増で、能登の進学率は約70%に達し、大学進学率も約25%と県平均に肩を並べるようになった。

イ 珠洲市のある農家の主婦Aさん(年齢64歳)は、今年の冬も関西方面へ出かせぎする予定である。目的はこずかいかせぎと観光で、明年になると、国民年金の支給が受けられるので今年が最後の出かせぎになるといつていた。



## (2) 暗い面

ア 出かせぎは、老人、子供を残して数か月も家庭を離れることから、子供は不良化に走り易くなり、親達の心配は言葉につきせぬものがあり、将来の人間形成に、どのような影響をおよぼすか大きな社会問題として残されている。一例をあげると、奥能登のK農家は、両親が出かせぎ中、子供が不良化に走り、そのつぐないに出かせぎで得たお金の大半をついやし、もう出かせぎはしないとっているうよな事例もみられる。

イ 出かせぎ者の長期音信不通、出かせぎしても一文も金を持って帰らないといった家庭の悲劇はあとを断たない。珠洲市の大谷、清水両小学校では、毎年、冬期の出かせぎの両親に手紙を送り、親子を結ぶ強いきづなどとしていることなど、深刻なものがあるようだ。

ウ 世帯主、後継者など、農業経営の中心者が出かせぎに出るため、農業に対する意欲も薄れ、山間地の田畑耕作放棄など、地域農業の振興に支障をきたしているところも生じている。

## V 出かせぎ者の展望

能登地域の出かせぎ者数は、将来どのように推移するであろうか、関心の高い問題であるが、その推測は、非常に困難なものがある。要は、現在計画されている奥能登の開発が、将来どの程度の進展をみるかにかかっているといても過言ではない。ただ、現在の産業発展水準から推測するならば能登地域、特に奥能登地帯の出かせぎ者は、ここ当分減少する要因は少なく、出かせぎ先の景気、不景気の影響で、年次によっては、多少の増減はあるにしろ、おおむね横ばい傾向をたどるものと思われる。

問題は、現在の出かせぎの主体をなしている世帯主が、世代の交替とともに、どの程度の出かせぎ者が減少するかにかかっている。現在、農家の後継者と目される青年層の多くは、他産業の専従者となっている。この人達が世帯主となった時点で、おおよそ、現在の出かせぎ者の半数程度に減少するものと推測される。そして、その時期は、現在の出かせぎしている世帯主の年齢からおして向う10年後ではなかろうか。

(石川支部)